重修真書太閤記

五編 二

へ13
459
42

特 13 へ
門 5
號 459
巻 42
消印
福希
同攻會印

重修真書太閤記五篇巻之四

織田殿上洛御家人叙爵の事
并赤松小寺別所等初謁乃事

三州長篠の合戦織田殿の加勢によりて開運を得たりとて濱松岡崎の悦喜限りなく信長とも今度ハ武田の鋒先を挫きたりとて勇氣撓まず凱陣なしたまひ是等の趣奏聞あらん為六月廿五日岐阜を首途上洛ましまし相國寺を以て旅宿となされやがて參内ありて三州合戦の次第を逐一上奏ありしかハ叡感あさからずよろしく抽賞の沙汰あるへしと宣下なさる是に於て諸卿參陣僉議の上信長官位

昇進あるべき旨を奏聞ありしかば中納言に轉任あるべき由内〻御氣色ありつれどもいまだ四方平均せず逆徒の殘黨處〻に割據してゐるに勸賞の御沙汰近頃以て勿体なしとて再三辭退ありしかば嫡子信忠正五位下に叙し信長勳功乃家人等叙位任官の事を請申されけるよしを申のまゝに勅許あり木下藤吉郎秀吉筑前守に任じ明智十兵衛光秀は日向守に任ず

木下藤吉郎秀吉の五位に任ぜしは天正三年十二月三日なり今年四十歳江州小谷長濱乃城主たりし時なりたゞし名字を惟任と改めらる爰に丹羽五郎左衛門尉長秀を惟住と改め受領をへきよしと仰出されしかば其は皆より呼付し五郎左衛門尉がよろしく候とて御受申さば塙九郎左衛門をば原田備中守と改め簗田左衛門太郎をば戸次右近と改めらる是は九州の舊き名字なり天下一統の後此者どもに鎭西をば宛行るべしとの深志なりとぞや其後信長筑前守を召され秀吉も何とぞ名字をあらため然るべしと仰られしによりて秀吉謹で答申けるは事新しき申条に候へども卑賤の御奉公より段〻御厚恩を受如是立身仕り所領も過分に拜領いたしその上に叙爵仰付られ冥加のほどおそろしく奉存候たゞし名字を改め候様にとの御諚に候へどもしこまり入候然しながら存付候名字もなく候へば改め可申やうもなく候へども今日如斯人

がましく世に走廻りしも殿の御威光に依し事なれハ御家
の老臣柴田丹羽の名字を一字づゝ申請度奉存と申上しかバ
ハ信長大に悦ばせ玉ひ武功に於てハ柴田丹羽両人の上に立
べく所領もまさ両人に増て大身なり左様の筑前が彼
等の一字を申請んとハ神妙なる申条なりと御感の餘て
両人を召寄られ秀吉が所望の由を告玉ひ面々異存ある
べからずと御諚ありしかバ柴田丹羽も畏入りし御請
申けるによりて秀吉大によろこび是よりのち木下を羽柴
と改められけり
流布本羽柴の字を種々に評論あり然れども其説浅
膚なるに足ず其羽ハ覇字柴ハ司馬の意をとる司馬は西

土の三公司徒司馬司空の一なりと云に至てハ捧腹なり
堪ず抑上古ハ姓と氏との二つのわかちして中古より
姓氏名字の三つとなり近世に至てハ氏を知て姓を知ら
ざるもの多し姓氏ともに知ざるものあり是姓氏
の一變なり略して其大略を云べし　姓とハ　朝臣
真人　宿称　連　公　首　臣　造　直　忌寸
村主　縣主　使主等をいふ　朝臣ハ朝臣なりさせ
の約そなり真人ハ待人なり　たまとの約つなり待とハ
其來を待ところなく今俗に客席と云意と知べし宿
称ハ其處称にて至尊の側に寝處する義といへども
信がたし宿直の意にして去来宿の意なり朝にハ去

夕に來來は窩と云義なり連は群の主にてその一群
の主と云意なり公は君乃字の音の轉じなり首は
夫の義なり仕へぬ一夫と云臣は唯の意造は御奴なり直
は貴人の意た」とて」と通音なり忌寸は齋戒の意縣主
は某縣の主村主は某村の主の義にてすべて姓は人品を
別つ爲の名なり氏は源平藤橘の類るしく源はその本
天皇の身に出るの義を取は身本の意なり平は平安
城の義を取藤原は大和藤原乃里大織冠居宅の名を
取と同し橘は母の氏を取氏の義は生出の意なりうむ」
は歸てうと」なりいつは」反してち」となる因て上古は母
乃氏を取しなり然るに後世氏族繁多にして称呼ま

きら〳〵しくなりしなり其居處につきて別称を
立たり藤氏にして南家北家式家京家の四流を別つ
其南とは南京の南邊に宅ある故にて北とは南京の
北邊に家ありしを以てなり式家は其祖式部卿たりし故
京家は其祖左京大夫たるを以てなりことに南京にて
のことなり特藤氏にのみ此別あるにあらず諸氏にも
亦ありしなるべし祇傳ふるところゝ真楯の宅山城
長岡にありし因て長岡大臣と称し魚名攝州河邊に甍
を因て河邊左大臣と称す冬嗣の第左京にあり閑院
と号し因て閑院右大臣といふ良房の第を染殿といふ
因て染殿大政大臣と称し基經の第左京堀河にあり因

て堀河殿といふ時平の第を本院といふ第三入とあく
別居し時平嫡を以て本第に居故に本院と云師輔乃
第は九條にあり故に九條右府といふ橘諸兄の第山城井
堤にあり故に井堤左大臣と云但丞相大臣のミ此称あ
るにあらず満仲の家摂州多田にあり因て多田の満仲
と称す光衡乃家濃州土岐郡にあり因て土岐の光衡と
称すあるひは父藤氏にして母佐伯氏なるを以て佐藤
と称し其祖齋宮頭たるを以て齋藤と称し其祖内舎
人たるか故に内藤と称しその家近江州にあるを以て
近藤と称し其祖木工頭たりと云て工藤と称し主馬
首たりと云て首藤と称すすべてその居地と官とに

因てその称を別つ故に称すかしく姓氏を異にするあ
て足利畠山大内秋田のごとき是なり藤原秀郷乃後
足利に住す足利犬夫成行と称す源義國もまた足利
に住す因て足利義國と称す平重國武州畠山荘に
住す因て畠山重國といふ源義純畠山重忠の後を承て
また畠山と称す百濟國琳聖太子の後防州大内に居
す因て大内と称す源頼兼大内裏の守護たり其子
孫終に大内と称す藤原景盛秋田城介たり子孫秋田
城と称し略して城とぞいふても称す安倍愛季秋田
城に居す子孫秋田氏を称すまた本宗の称と別家の称
と二ツを合せ称するあて首藤山内といひ新田田中

といひ土岐池田といひ佐々木京極といひ佐々木飽浦と云が如し これまた称号の一變なりあるひハ其地に居ながらにしてその地を領するを以て称とし藤原重房上杉の荘を領せし故に上杉と称し平俊継の祖伊勢國より出しと云て伊勢と称し藤原武本甲斐國に任ぜしと云て甲斐と称するすべて人々心に任せて称を立故に姓氏いよく混乱に至るなりあるひハその宅辺に楠木ありと云て楠木と称しあるひハ其祖の詠歌世に流傳して物加波と称し又ハ祖の名を以て称するあり田村丸乃後田村と称し秦川勝乃後川勝と称するが如し又二家を合せて一家となすもあり

諏訪氏と神部氏とを合せて諏訪部となし横内勝間田を合せて内田となし枝村吉村を合せて枝吉となせしたぐひ佐伯近藤を合せて佐藤と云の類ふまハ異とするにたらず然らバ木下の羽柴と改称せる又此類と知べし只あやしむ出羽國寒河江の城主羽柴勘十郎義勝と云ものあり木下に先だつて羽柴氏を称す決して丹羽柴田を合せしにあらず或ハ云斯波乃庶流に羽斯波氏ありしが一轉して羽柴となるといへり其明證を得ざれバ姑く茲に擧て博雅に問と云

然るに信長上洛ましまして相國寺に逗留ある由を傳聞ちるくと上京して見參するもの多かりける中にも播州の

赤松弥三郎則房小寺藤兵衛尉政職別所孫右衛門尉重棟まつ先に伺候せしかハ信長ことに悦びたまひ各本領相違あるへからす西國平均乃上ハ一廉恩賞あるへしと仰出されしかり則房ハ赤松則祐乃孫伊豫守義雅の子性存乃男二郎法師丸後に左京大夫政則と云従三位して赤松の中興たり政則の子兵部少輔義村その子左京大夫晴政その子兵部少輔義祐その子則房なり小上總介と云別所は赤松の支族ふして圓心入道の外孫別所右衛門尉敦範を祖とす重棟ハ敦範七代加賀守光治の三男なり何をも播州の名家なれハ西國征伐乃案内者たるへしと信長心中小深く悦びたまひしとなりされハ併羽柴筑前守と小寺

孝高と内〃はかりし処なりとぞ其後信長山岡美作守木村次郎右衛門尉に普請奉行とふし瀬田の橋を掛直さセ七月十七日岐阜へ帰城ありし玉ふ

信長父子越前進發の事
并柴田羽柴杉津口ふ向ふことを望む事

越前國ハ去天正元年八月朝倉義景滅亡乃後織田家の領知となりけれともその氏と侍と和せず容易に處置なし難きことを木下藤吉郎計り知を以く信長に説て織田家入せ居しめ朝倉家降参の士を以て國の守護奉行となし其相争て相共に斃るゝ時をまたれけるに果しく桂田ハ冨田に殺され冨田ハ一揆に賊されぬ一揆ハ本願

寺の家司末寺と相闘ひ國中困窮し民争亂に苦む由
を羽柴筑前守秀吉江州小谷にありてほの伺ひ知今
ぞ越前征伐の時いたれり片時も猶豫すへきにあらす
と思慮しけれバ早〻岐阜へ註進して御出馬ある
へくよし勸め奉りしかハ信長にも兼ておもふ所の
事なれバより神速に陣觸ありて今年八月十二日岐阜
の城を首途なし給ふ先鋒の面〻ハ誰〻ぞまづ一番に
越前の案内者なれバ惟任日向守光秀その次ハ柴田修
理進勝家惟任五郎左衛門尉長秀羽柴筑前守秀吉長岡
兵部大輔藤孝佐〻内藏助成政原田備中守長年戸次右近政
辰荒木摂津守村重以下すべて三萬六千餘人その次は

信長御旗本稲葉伊豫入道一鉄齋父子三人瀧川左近將監
一益池田勝三郎信輝同嫡子勝九郎之助前田又左衛門尉利
家蜂屋兵庫頭頼隆安藤伊賀守不破河内守桒原是等を
宗徒の勢として三萬餘人後陣ハ北畠信雄神戸信孝織
田七兵衛信澄以下一萬余人都合七萬八千余人又若狹路より
ハ粟屋越中守同弥四郎逸見駿河守熊谷傳左衛門尉山縣
下野守白井民部丞松宮玄蕃允同左馬助内藤筑前守畑田
修理少進寺井源左衛門尉香川右衛門大夫等一萬八千余人
その外丹波丹後の國の勢ハ一色左京大夫義定數百艘の兵
船に取乗越前の北浦へ押寄民屋へ放火し燒立ければ本
願寺より差下さし越前國の守護代下間筑後法橋ゐ

Shimozuma Izuminokami

りしを聞大に驚き郷民ともを催促しけるに郷民とも
その下知に従ひ織田家乃軍勢雲霞乃如く山ミ峯ミ
に充満して夥しけれバおのがさま〳〵便宜を求めん
て谷の底林の蔭へ逃かくるを専として防き戦んと
するもの一人もなし下間まさしく仰天しまはせ居合せ
たる勢を分て防げやとて江州越前の境なる虎杖の城
に下間和泉守条の照見寺宇坂の本向寺を大将として
二千余人木の目山火打か嶽には和田乃本覺寺石田の西光
寺三千余人鉢伏乃城には杉浦壹岐法橋ならび橋立乃
真宗寺大町の専授寺二千余人今庄火打山には海河新道
川二ツの落合をさし塞き要害堅固にかまへて下間筑

後法橋藤島の超照寺荒川の興行寺四千余人府中乃龍
門寺には三宅權之丞八千余人中河内には七里三河守八百
余人河野新城には若林長門守同子息新五郎安井右衛
門尉稲村治大夫二千余人なり杉津口の城には大塩乃圓
光寺を大将として境圖書山村左近五十井瀬右衛門尉
是等は一揆乃野武士勇功の輩なりその外窂人堀江中
務丞景忠をはじめ神波七兵衛三園采女等を始として
四千餘人大切の處なりとて丈夫に構へて待かけたり
一書に大将下間筑後法橋豊原寺を打て出兒島九郎
兵衛尉か許に陣を取敵は棗浦湊浦より寄るなら
んとて安嶋浦の三保島又三郎か高山淺蔵山を要害に

かまへ又三國の湊より寄ることもやとて杉浦壹岐乃法橋和田乃本覺寺宇坂の本向寺荒川の興行寺森木乃照護寺を大將として三國の正薫同教順髙木の淨光河尻の仙谷同正光小黑の西光森田の由疑を始吉田足羽坂北坂南の一揆等を合せて三萬余人棗郷三里濱三國の湊の切處〳〵に砦を築き一勢く籠置たり吉崎の湊にハ七里三河守藤島乃超勝寺照嚴寺を大將として二萬余人又河野口をハ若林長門守杉津口は大事の虎口なりとて大町乃專授寺并に堀江中務丞景忠まくに上口をも指塞くへしとて杉取よハ下間和泉守木目峠よハ石田の西光寺鉢伏の城よハ摺立の眞宗寺池の太良よハ大塩の圓光寺府中の龍門寺にハ三宅權之丞を籠置大將筑後の法橋ハ今庄の病に打出火打山を詰乃城に構へ海河新道河二ツの流れの落合を指ふさぎ鉢崎乃祐海志津の了珍南居の正船木田の明圓眞栗乃瑞相江守の丸形等を先としく丹生郡今南西郡今立郡南仲条郡乃一揆共前亡朝倉家の浪人以下その勢雲霞のごとく馳集るところ◯

十四日織田家の大軍敦賀に着陣信長ハ郡代武藤宗右衛門尉ゟ舘よ入御諸勢都合十萬八千余入敦賀に居餘て江北塩津の濱まて續きたり爰に柴田勝家ハ何まへなりとも強からん方へ向ハんと思ひけるが杉津口ハ大切の虎

口とてかき敵多く籠りつれハ羽柴筑前守を大将とし
て大勢さし向らるへきよし同評ありしと聞えけれと
それをハ知ぬおもむきにて杉津口へ勝家一人罷向ひ申
へしと請けれハ信長聞食此口ハ大事の虎口とて秀吉は
じめ大勢罷向ふへき由既に評定一決ありて然ハ勝家も
秀吉と共に向ひゆくへきとありけれハ勝家打込の軍を好ま
ず只一手にて攻落しゆくへし願なくハ某一人に仰付られ
ゆへと申けるにより秀吉杉津ハ大事の處なり大勢に
て攻め方然るへしと申されけれとも勝家更に聞入ず存
する旨のゆへハ一向に某一手に仰付らるへしと申によれ
去ハいとゝ柴田一人に任さらる勝家大によろこひ柴田

宮内少輔同伊賀守同監物佐久間玄蕃柴田源左衛門尉徳
山五兵衛尉近藤無市杉江彦四郎毛受勝介拜郷五左衛門
尉安井左傳次をはじめ究竟の壮士五千余人を引率し
て打立けり殊に今日ハ朝より大雨ふりて夕方は川く
の水増て漲り落る音たかし羽柴筑前守秀吉ハ杉津
口を勝家に奪れ然ハ河野新城へ向ふへしと思ひ其
旨を言上をしに信長にも秀吉か杉津口を奪れ憮本
意なく思ふらんと思召けれハ神速に許容ありて且一
手にて向ふへきやと尋られハ秀吉ハ一手にてもよくゆく
とも新城を攻落し直に外へ向ふに便よけれは外の諸
将を一両輩添られゆへしと申により惟任稲葉山崎を差

添られたり秀吉光秀を案内者として十四日乃夜敦賀を出帆し船中まく心静ゑ兵粮ちたくめ河野浦へおし寄たり

重修眞書太閤記五編巻之四終

重修眞書太閤記五篇巻之五

秀吉河野新城を乗取事
并一揆等諸城退散乃事

羽柴筑前守秀吉惟任日向守光秀等敦賀より兵船数百艘ふ取乗夜中ふ河野へ着船し少時軍兵を休息をしめ十五日暁天ふ新城へ押寄る當城乃着林長門守親房子息新五郎親次武邉巧者乃勇士あれまハ防禦乃用意嚴重小搆へ持場〳〵を堅めて待懸たり秀吉惟任ふ向てすしるハ方くハ是より木目峠鉢伏何ふくも心ふ任せて寄ゐへ河野へハ某一手ふく向ふこそ然るへくらんと云を聞て惟

任是まく一所に寄ありらいまく當城乃落去もうびタへ分ま行んと本意なうらん殊に貴方の勢なかりにくハ心元なし共よ河野に向ひ彼城落去れ上にて引分るべしと云にう然ハ兎も角も面々の仰に從ふべし但敵は若林長門守本願寺門徒乃中に隠れなき勇士なり侮りてハ仕損ずべし隨分味方の兵士損亡なき様敵を僞引出して討取べきなり各々如斯なしたまふべしと計策を示し合せけまへ惟任稲葉尤なりと承伏し秀吉が謀るまゝに從ひけりそのうち秀吉加藤虎之助清正福島市松正則片桐助作直盛堀尾茂助吉晴脇坂甚内安治蜂須賀小六家政

小六家政ハ彦右衛門尉正勝乃男永禄元年戊午の誕生なり今年十八歳後に阿波守入道して蓬庵と云脇坂安治ハ廿二歳堀尾茂助ハ卅二歳片桐ハ廿歳福島加藤ハ共に十五歳なり

此輩に密謀を示し合せ兵士六百人を添て路乃左右り埋伏させ舎弟小市郎秀長に中村弥助藤井又太郎青木勘兵衛等三百餘人を付何も郷民の出立にて紙旗紙幟をさしなるかの跡より押來らを秀吉ハ惟任稲葉山崎と一手に成て二千余人河野新城に押寄閧を作り鉄炮をう掛備を乱して短兵急よ責かくる勢ひなしけまへ城乃大將若林長門守待まうけたる處ぞハあり少も動せず士

卒を励し大木大石を投掛く防戦も寄手どつと鯨波を作り鉄炮をきびしく打掛ながら城近く塀を乗んとまでハ寄もさくず只防戦の矢石に恐怖乃色もなかりしかハ若林新五郎安井右衛門尉等血氣にはやる若者なれハ寄手の色を見積りていざや馳出追散さんと勇みたるを長門守堅く制して打出さきんハいかく堅固に守り防ぎける故寄手も戦ひ労れし体にて猶豫しける折しも辰巳乃方より紙旗紙幟をさして三四百人寄手乃後を取切んと馳向ける何者なるやとよく見れバ旗にも幟にも南無不可思議如来と大文字に黒〻と書たりさてハ紛るべうもなき一揆の郷民ともが此城の後詰をするとおぼえたり何處乃者共ならんとあやしめば佛敵法敵なり餘すな漏すなと声〻に呼なりく突立けるにぞ織田方大に仰天し備四度路に取乱し散〻になりて奔走するを見て城中の兵士等今ハ疑もなき一揆乃郷民共なるに打出て力を合をりや方〻と競ひ立は若林新五郎安井右衛門尉いりまでためらひ見物せしきなや打出んとひしめくを長門守さのみ押留べきならず祢ハ早切出らと下知せられ城門を八文字にさつと開かせ若林新五郎真先に駈出るをみて長門守も同じく駈出新五郎討すな者共續けと突掛れバ羽柴稲葉惟任山崎が勢ども狼狽廻り一戦にも及ばず散〻に敗走するを若林父

子勝にのりて十町余までも追たりけるが長門守急度心付
織田方かほどにもろく打負べしとハ兼ても思ハぬ事なるか、
し是ハ敵の謀ぞあるや引返せ若者共と味方を麾けど勝
誇てし勢の僻なれバ耳にも入ずに追行けれバ長門守
只一人氣をいらちて下知する處へ鉄炮の音響くや否羽柴が
伏たる加藤福島片桐堀尾蜂須賀脇坂以下究竟の勇士をす
ぐりて六百余人むらむらばつと起り立大勢の中へ切て入
面もふらず戦へバ長門守さてハ寄手の謀にてたばかりしを
けりなと打破りて城に入門を固く閉て能守る伏兵は小勢
なるぞ蹄にかけて蹴ちらせよと鞍の上に立上りて下知
するを加藤福島たしかに見とめ大將なるめと思ひし

まく我打取んと取圍む長門守もさすが聞ふる勇士なり
自身手を碎いて戦ふなれども羽柴が勢猛けれども左右
あくなきを破るを得ず追ひまくらる戦ふ處へ羽柴惟任
稲葉山崎大浪の激る如く取てかへせバ若林父子安井右衛
門尉なりそ一世の大事なれ一足も引てハ誰に面を逢せる
き撃や人々切やその共と返し合をかへし合七十餘合ぞ戦
ふたりまことに項王の垓下の軍もかくやらんと敵ながら
褒ぬものもなかりけりされども若林が勢は大形近日の
一揆どもなれへ加藤福島に切立られ何かハ以てたまるべき
逸足出して逃たりけり長門守父子大いに怒り云甲斐なき
ものの振舞や日頃左様にも契りしものを腹黒返して軍

せうや我に續いて敵を駈散さよと息も繼あへず諫むれ
と耳にも更に聞入ずその上只今追馬の左右に立たる一揆
どもハ彼紙旗紙幟の郷民なれバ堅固門徒の國人ぞと心を
許し居たりけるが時分ハ好ぞと長門守を取込て前後左
右より突立けれバ若林父子大に驚き汝等ハ門徒の者なる
が何故に某を敵とするぞ冥加に盡し奴原かなと訇れ
バ彼者共からくと打笑ひ愚や長門守我々を門徒の郷民と
おもひけることのおかしさよ汝を生捕て先鋒となし
動かさんと織田殿の下知によりて木下小市郎淺野青木の
某之と呼はり切かゝれバ若林父子あわてく周章しいかに
もまれども圍を出ることあたはず三人とも一所にて討れけ

り
一書に羽柴秀吉武藤宗右衛門尉を案内者として十
四日の戌の刻敦賀の津を出船し十五日寅の刻河野浦に
漕着濱邊を堅め居たる安井他力之助稲村念佛之助よ
く防げども寄手嚴敷鉄炮を打掛しかバまたゝく間に
百四五十人打倒され叶はじとて後の山へ逃登るそのち
秀吉船を渚に漕付諸勢を陸へ上るや否船を敦賀へ漕
戻させやがて若林長門守が新城へ押寄攻立無二無三
に乗込ハ城主長門守同雅樂助阿波賀三郎稲村念佛之助
安井他力之助河島波太郎天屋吉藏以下ことごとく討死す
といへり

大将の討死しけるを見て城中に残り居ける者ども思ひ／＼に逃うせて河野新城乍に落去しければ羽柴筑前守討取し若林長門守父子の首をはじめ名ある侍の首に生捕五百餘人を添て信長の本陣へ送りければ惟任日向守光秀稲葉一鐵斎山崎源太左衛門尉等ハ木の目峠鉢伏を責落さんと面々の勢を引まとめ押寄たり筑前守ハ一揆の偽兵を以て利を得しかバ今一度これを行ばやと思ひて小市郎秀長中村弥助吉房浅野藤井青木等に加藤福島脇坂堀尾を加へ何も郷民の如くに出立せ他處の一揆が杉津乃一揆を援兵する様に取なして搦手へむかはせ筑前守ハ一千餘人を引率し柴田修理進勝家が手をうしろさして馳行ける

杉津口へハ柴田一手短兵急に乗破り手柄を顕さんと十四日乃夕暮より馳向ひけるが不知案内の處といひ夜合戦をあぶなし然るべからずと郎從どもしきりに諫しかバ勝家もこれに從ひ靜かに押寄夜の明るを待て責かくらんとぞ構へたり城にハ大塩乃圓光寺を大將として大勢籠りたる上に加勢に來りし堀江中務丞景忠ハ朝倉譜代乃侍なりけるが義景を怨る子細ありて居城本莊に楯籠り謀叛の聞えありしにより義景討手をさしむけこれを責しかバ景忠ハなすべく越前を退去し加州に落行加州の門徒に堀江が武勇を賞美し軍師となし馳走かぎりなかりしかバとに堀江も加州に安居なしけるが杉浦下間を不快におもひ

今度の乱を幸に當城に籠りながら織田方へ降参せんと
き旨を先達て申送りしかども勝家らさだかならざれバ
すぐ許容せざれ此事かくとさとれども色に出しかねしや大
將圓光寺景忠をあやしみて城中に於てハあしかりなんと
て城外小柵をかまへ景忠をうつし神波七兵衛三園采女をそへ
ども堀江が手の者を引まとめことごとく城中を出し柵のう
ちにぞ籠たりける景忠もさてハ此坊主め我胸中を推知
きしと悟られしを然れども只今争ふてハ却て然るべからず
びと了見しさしづに從ひ柵の内へぞ籠りける
堀江七郎景忠永禄八年八月義景を怨みて加州へ退去せ
しと云本荘ハ吉田郡にあり天正三年三月景忠本願寺門徒

を怨み神波七兵衛森田三左衛門尉を使としてて敦賀の
武藤宗右衛門尉を頼み信長に音信を通じければ信
長本領安堵の上に加州にて二郡加増あるべき由の朱印を
出されしに今度杉津口に籠られしが大に悦び一書に見ゆ
去程に柴田勝家十五日の早天に五千餘騎を引率し押寄け
れバ堀江中務丞まづ先に柵を開き手勢を引つれて寄手
に加はる勝家對面して神妙なりと軍忠を致されしへ恩賞ハ
功に依べしとありければ景忠大に悦び新参の勢共
なれば先鋒に加はり一合戦仕るべしとて柵のうちへ柴田
が勢を引入堀江眞先に進で責かかる城中にハ兼て疑
ひける堀江が事なれバ少も騒がず鉄炮矢玉をはなしまたを

雨霰の如く射かけ打出し大木大石を手にまかせて投
出し防ぎけるにぞ堀江神波三園の者ども面を向べき
様もなく進みかねてさつと引勝家これを見て戦場に臨
みし者が矢玉を恐れ引といふことやある骨なしく續け
くと諫めつゝ真先に立ばさすがに大将に過あらせてはと思ひ
返し堀江が勢ども兜の錣をかたむけ楯を真向にさし
かざし責たりければ柴田下知して鉄炮を厳敷うたせけれ
ば城中狭間を閉少しもひらけて見へけるにより勝家得た
りと士卒をすゝめ無二無三に乗入や若者共と下知しける
聲の下より柴田が甥の佐久間玄蕃允盛政打ども射ども
事ともせず真先に進みけるを見て徳山五兵衛拜郷五左エ

門尉近藤毛受中村などいふ究竟の者ども我劣じと押詰
く揉しかども圓光寺武勇絶倫かつ軍配の巧者なれば防
禦手だても行届き矢玉薬は元より多く貯へたり柴田が手
の者猛けれども防ぐ兵士また尋常ならねば寄手に手負
死人多くして終には責口を引退けるにより城中その間に息
を継また関をあげて寄手をあざむく寄手は城兵にあざ
むかれ塀を枕に死や〱と曳々聲を出しかいきつれて
進みあぐる太刀を打合せするまでもなく空しく木石に當
りて命をおとし餘りに口惜ければ寄手たゞ城を白眼で
佇めりかゝる處へ羽柴筑前守一千余人の兵を從へて馳来
り柴田に對面し河野の城をば惟任稲葉山崎等と共に未明

に押寄責落し城主若林父子を打取首をバ生捕ともに
添て御本陣へ送り遣ける惟任稲葉山崎をバ木乃目峠
鉢伏乃城へ向わせ其ハ御本陣より杉津口の要害もよく守
る處の兵士も多き由聞食を隙明次第罷向ひ柴田に力
を并せよと仰下されしに依て走廻りて其ハ船にて海
上より責る体をなして城兵を搦手へ廻しかひなん然ら
ば大手乃人數透ゆくべしその時手稠く御攻ゆへとすゝめければ
勝家心中に秀吉の猿冠者め河野を落して爰許へ加勢と
して来りしさへ心よからぬにおそふ處に城兵を搦手へ廻
しかなんなど入ざる軍配りなさるれども殿の仰とあれバ
これを拒めん由もなし又當城いまだ落ざる以前に木
目鉢伏をはじめ諸方の城々落たらバいよ〳〵面目を失ふに
似たり然バ猿めが云まゝになしたらんこそ然るべからん
と思ひ廻し筑前守が申旨にぞ從ひける秀吉大に悦び
手勢を引て搦手へ廻りて海上より鉄炮を打かけゝれバ城中
大に狼狽し此口ハ海上浪荒くして岸たかしたやすく
敵のちかよるべきにあらずと油斷しつる処なれバ俄に備を
引分てこれを防ぐ柴田心得責立てもときまあらず揉
たてけるほどに城中いさゝか難義して見へける処へ南無
不可思議光如来といふ九字の名号の旗をさし五六百人ばかり
わと出來て城の搦手へさしかゝり羽柴が勢の後より切
てかゝる羽柴が勢共大に驚き散々に乱れさわぎ逃ちるところに

き程に追ちらし一揆の勢ハ搦手の城戸際に打寄たれ
ハ今庄の下間法橋の御頼により門徒の者共當城の御加
勢に参りしと呼なりければ城中よりも神妙なりと感賞
し城戸を開かんとなしける時寄手取てかへし一揆の勢
の後よりわきまたしと責かゝりければ一揆また引返し寄
手に向ふ城中にてハ此口を守り居ける坂井圖書允字乃
名号書たる大旗ハ下間が手の一揆に相違なし當城くつ
ぎの爲に来りし勢の軍なるを餘所に見なさんと弓
箭の道の瑕瑾なりいざや打出與ゝ寄手を追拂ふべしと
て城戸を開て馳出たれバ一揆どもなや寄手を切まくて
追ちらし氣色ぞふく居たりしかバ坂井圖書なを寄て

一揆と賞し式代して城中へ迎へ入させて秀吉此体を見て今
ハ心安し手痛く責よとて下知しければ承てぬといらへし
て先鋒乃足軽筒先をそろへはるく放しにうちければ
玉の飛こと霰乃如く烟乃靡こと雨雲の峯を出るにさも
似たり城中にても爰を専途と防ぎければ互に間あらじと
ハ見へざりけるにいつしか城中に五色の吹貫をおしたて
そのかたはらに金の瓢箪の馬印雲の晴間にかゞやきけれ
たれバ城兵さらに仰天しまハいかに何の間に入たるやら
んさてハ一揆の加勢と名乗し勢ハ羽柴筑前守にてあり
けるか去ハ取こめ一人も漏さじ討取と呼なく戦ふなど
に誰かハしらず城戸を内よりおし開き寄手を城中へ引

入たり城の大將大塩の圓光寺今ハ叶ハじ一方を切破りて落んやと透間を求めて走廻るを大手の寄手柴田が甥に佐久間玄蕃允盛政今年廿一羽柴が吹貫の城中になびくを見付けるや搦手を乘取しぞ口惜や大手の寄手後れさましや乘入や何の爲に命をバ惜しむべきぞと血眼になりて突掛りけるがかくしたるなく圓光寺と行逢たり何とてんとも擬議をべき面もあらバ突合しが佐久間終に突勝て圓光寺の首を取大將をさて討れしと見て寄集りし門徒の輩誰が爲に骨をバ折べきぞ一先遁れて世にあり行をも見えてめと切ぬけて出去しかバ城ハ終に落たりけり勝家羽柴が奇計にて城を乘取しことを憤り秀吉

に向ひ何とて謀計をちとばかりても告ざりしや某が請負し手柄を無にせんとの事なるべしいかに腹たちやとひがるを秀吉おしとゞめ左思さしも理ながら謀ハ密なるをらしとぞその上御邉の傍に堀江をそばめ新に降參をしそのも其數居たり何とて明白に告らるべきやそれいまづさし置御手にて城の大將圓光寺を討取をなくば當城を責落しなば勳功たれりはあらそひなべきと諫められ勝家もまさりし由もなく終に城に火をかけて焼たてしかバ諸方の城々の烟に驚き何れもいづれも城を開て落うせけるにぞたゞ一日のうちに越前大かた平均になりにけり　惟任稻葉の向ひし木乃目峠火打

ヶ嶽の城にハ和田の本覺寺石田の西光寺三千余人ありて籠り
けるが河野の落城せしと杉津の火の手に恐怖し防ぐ勢も
なき処へ乗入終に両寺を討取ぬるとも同じく焼立直に鉢
伏の城に押し寄けるに杉津壹岐法橋専捘寺真宗寺一戦
にも及ばず城を棄て落行しかハ惟任稲葉破竹の勢ひにて府
中をさして進發す柴田羽柴も杉津口を責落し府中に押
寄龍門寺の城を囲み責けるに城主三宅權之丞しばらくこら
えて防戦しけれ共終にかなはず三宅討死し城を落しける由
を敦賀の本陣へ注進しけれハ信長大に悦ばれ同十七日龍
門寺へ本陣をうつされけり

重修眞書太閤記五篇巻之五終

重修真書太閤記五編巻之六

越前一揆滅亡國中仕置の事
并柴田勝家北陸藩鎮乃事

越前國一揆悉く沉落し信長府中龍門寺へ著きたまへハ
朝倉孫三郎景健同小三郎景胤府中御陣へ参上し今度
一揆與同乃罪科御免あらんことを請ひけるに此等を
敵となり味方となり表裏反覆手を反す如きなれ共
なれバとて原田備中守長年をして是を誅せられ
景健ハ安居の城主にして義景の従弟なり義景滅亡
の時安居に引籠りて總領家をも助けず又織田家へも

降参せしに一揆にも組せしに一揆滅びて後降人となり
出んと云しを郎等山内源左衛門尉金子新之丞
父子制し諫しかども景健きかれど用ひず朝倉三郎
景胤と共に降人に出けるを信長聞食その景健と
云男ハ不忠不義禽獣にも劣れりとて降人の向
駿河守久家に寄騎に付られしかバ景健無念乃至
りとて憤りけるを久家信長の命を請て喧嘩
に事よせ是を殺しぬ其後四五日經て三郎景胤
をも誅せられてけり
其後本願寺門徒の一揆一人も残らず殺し盡すべしと
下知ありけるを羽柴筑前守いそぎ御悪しミハ去

ことなれども坊主郷民の類殺し盡しぬれバ國中耕作乃
便を失ひかつハ君の不仁をあらはすに似たり其張本たるを
誅せられて百姓町人老若男女前非を悔ゆれバ御免
あるべく候と諫め奉りしかども信長聴入ざりしに越前
西方越智山北の庄口山家原崎の邊へハ原田備中守不破
河内守佐久間甚九郎安藤伊賀守笹岡兵庫助二万餘人
また中河内口へハ柴田修理進羽柴筑前守惟任日向守
丹羽五郎左衛門尉稲葉一鐵斎三万五千餘人みなまつ
鳥羽の城を責落し夫より九頭龍舟橋森田長崎金津
の庄迄一揆の郷民を切捨ておし通る大野郡宅食三保
河内表へハ前田又左衛門尉佐々内蔵助瀧川左近将監武藤

宗右衛門尉三万餘人其外金森五郎八原彦次郎が輩都合
十万餘人なれば國中四方に別れ押寄て城郭砦を責
落し一揆の家々焼立て男女老少をいはず切殺し突殺し
山林幽谷藪の陰岩乃間に隠れし者共まで悉く探
求め五町三町から見取て押行一處に切殺しくける程
に積れる死骸山の如く寺院坊舎民屋賣店残る処なく
たとへば袋の底を拂ふが如く籠の鳥をしめるがごとし十五日
より十九日まで五日の間に宗徒乃坊主七百餘人一揆の郷民
一万三千餘人を誅進せり信長此由聞食すことに以て
心地よしと感し宣ひける廿三日一乗谷より入御柴田丹羽
羽柴惟任稲葉戸次瀧川等を先陣として金津細呂木

より加州へ乱入能美江沼両郡を切取て味方の地とな
なし猶奥深く切入んとなしけるを羽柴筑前守大に
制し遠國に來り數日人馬を疲かして一日の休息も
なく不測乃敵國に深入せんは禍の根本たるべし
加州の者は越前と同じからず郷民の性質勇壮にして
軍に馴たれは將師の號令をよく守り仮令一揆なれども
歴々の武士も及ひがたし但これを侮り輕んじては
仕損ずべし殊に越前乃容子を聞て加州の者共防
戰の用意をなし心を一致なし覺悟を極めて相待
べし其處へ此方の勞兵をもって向はんとはいかなる策
とも存ぜず加州征伐今度に限りまじと述ければ

諸大將尤と同ずる人もあり大將の御下知を請て出陣しつる上ハ此次に攻入べし中途より引返しなんぞ剛勇の大將の氣に違ふべしと云人もあり衆議一決せざるにより然らハ一人御本陣へ參上し勝敗の理を盡し其の上にて御下知に從ふべしと云議に定まりけるが誰か引返し此理を大將に言上せんやと評定あるに羽柴秀吉某罷歸り申べきなれどもちと存ざるむねあれバゆへハ明智殿御歸り宜く言上あるべきにくいと申されバ光秀も秀吉の云処然るべしと思ひしかバ何様某罷歸り大將の御諚を請て再度爰まで馳歸り申べし夫まで少時人馬を休め給ふべしと申に

柴田稲葉も是に從ひけるにより日向守手の者十餘人引率し越前より引返し信長の宿陣ある豊原寺へ參上し進退の道理を盡し加越の時勢を論し味方頗る疲勞しぬれハ待設けたる剛敵に向ハんと必勝の術もなくハ萬一加州にて御勢後を取れなバ當國までの手柄まで無になりぬべしと言上しけれバ信長にも尤なりと同心ましまし然らバ加越の境の要害を構へ大將を殘し置歸陣あるべきに治定ありて加州の津浪大聖寺兩城を拵へ戸次右近を大將となし佐々權右衛門尉堀江中務丞嶋彌右衛門尉を籠置れ万事ハ戸次右近に相談すべしと下知せられしかバ光秀再度

加州に赴き戸次右近以下を残し留め諸将帰陣あるべき旨仰出されし由を傳へけるにぞ諸将いづれも同意して各陣を拂ひ越前北の庄に集まれば信長は豊原寺の度々一揆に與しけること僧徒のかくて有まじきことと怒りとく僧坊伽藍を焼きはらひ九月三日北の庄なる足羽の山に陣を取れさせて當國の仕置を沙汰し玉ふ

豊原寺は吉田郡に有り一乗谷より艮にあたる泰澄法師開基の伽藍なりしが天正三年九月二日信長當寺杉浦法橋下間法橋に與しけることを憤て放火ありしと云

但越前國は北陸道の要領にして大切の地なれば尋常の者の守るべき処にあらずとて柴田修理進に下されけれ北國の管領となされたりされども敦賀郡は武藤宗右衛門尉大野郡三分二は金森五郎八三分一は原彦次郎に賜はり柴田が與力となし府中城に十万石の領知をそへ前田又左衛門尉佐々内蔵助不破彦三郎に宛行ひこれは府中の三人衆と號し越前國の目付となし同じく柴田が與力となし玉ひかつ柴田が居城は北の庄然るべしとて瀧川前田惟任三人を奉行となし經營せしめさせて勝家當城に住し北陸七ヶ國を追々に切取べしと仰付られしかば柴田が威權かほど朝日の昇るが如くさながら織田家随一の大將とぞ見えたりける

一書に柴田修理進勝家此時五十萬石にて越前の守護職となされ大野郡の内三萬石を金森五郎八二萬石を原彦次郎敦賀ハ元の如く武藤を代官となしたまひ府中にて五萬石佐々内蔵助三萬石前田又左衛門尉二萬石不破彦三郎加州江沼郡にて阿閉淡路守貞秀能美郡ハ堀江中務丞景忠に宛行ひしが堀江景忠ハ累代の主に叛き一向門徒に従ひ又織田家より従ふ其心中なのめしかゝらずとて勝家に下知したまひ瀧谷寺に於てこれを誅しおハぬ次に高田専修寺派の称名寺常楽寺勝鬘寺本流院仙福寺讃門徒乃鯖江の誠照寺清水頭の毫攝寺横越の證誠寺中野の専照寺なりども元より本願寺門徒と不快なりしか國中の本願寺門徒悉く滅亡しけることを悦び信長の本陣に参向し禮を述ければ信長神妙なりと感じたまひ九月廿三日信長北の庄を發足府中に著陣廿四日椿坂に泊り廿五日垂井に著御廿六日岐阜に還御と云々

次に丹波國をハ惟任日向守光秀一圓に退治すべき旨を下知せられ丹後國ハ元より一色左京大夫義定の領國なりしが此度越前退治に手を合せし勲功を感賞ありたまひ本領安堵相違あるべからず丹波丹後共案内者に定められ光秀ハ直に船にて丹波へ押

渡し國中を平均せへしとぞ仰付られけりさて後
信長九月廿三日北の庄を立せられ廿六日濃州岐阜へ
歸城ありしゆしけるか年来本願寺門徒の狼藉を
悪まれ居たまひしかハ長島の門徒をはらひ越前の一揆
ごとく誅罰あらしたまひしと頗る暴戻なるに似たれ
ども彼徒もゆくゆく其罪あれと云べからず十一月十日
信長また上洛のよし聞えしかハ西三条大納言實枝卿
水無瀬宰相親氏卿江州柏原まで御迎として下向あり
西三条實枝卿ハ逍遥院實隆公の孫稱名院公條公の
長男なり今年六十五歳親氏卿ハ参議英兼卿の養子
實ハ公條公の二男實枝卿の弟今年六十二歳後に

權中納言兼成と改めらる
其外歴〻何も勢多逢坂山科日岡の邊まで御迎の
面〻充滿して御悦ひを申さるれハ信長の威勢曩祖
平相國乃繁昌をも凌ぐ時ふも増りておびたゞし然ハ
奥州の伊達大膳大夫輝宗飛彈の國司姉小路右京大夫
自綱入道休菴播州の別所小三郎長治同山城守吉相
いづれも幕下に屬し共〻天下静謐の功を致さんことを
望まる是に於て陣儀ありて十四日鎌倉右大將頼朝卿の
例を追れ權大納言の右大將に任じ昇殿を許されて
天盃を賜はり十七日拜賀を行はれける儀式まことに
嚴重にして四海泰平の功臣この大將なるに當りし也

見えたりけるがかくて信長おもふ様京都守護のため
江州蒲生郡安土山に居城を築きて岐阜をバ嫡男
信忠に譲らるべき旨内々その沙汰あり
一書に家人任官此月のことゝいへり河尻與兵衛ハ肥前守
武井夕菴ハ二位法印松井友閑ハ宮内卿法印に任ぜ
らる

江州安土山普請の事
并京都二条の城經營の事

其年も程なく天正も四年とあらたまり正月より
權大納言右大將信長卿帝都守護のため江州安土山に
居城を築かるべしとて惟住五郎左衛門尉長秀に

奉行を仰付られ晝夜をいはず急がせらる抑此
安土山といふハ松山深く峯そびへ要害よく湖水を
眼下に見くだして無雙の景地なり
國華万葉近江國の部に安土山より武佐まで一里
とありはじめハ中川八郎右衛門尉といひしものゝ住たりし後に
信長の居城となる今總見寺といふ禪宗なり寺領
二百石流布本に明智光秀安土山を相して名城の
地と云へるハ但武將の居處強要害によるべからず
戰國を切しづめ四海一統靜謐ならしめんことを思召
なにぞ要害に引籠りていかでか大功成就すべけんや
六十餘州をみな我居處なりとの御了見ありてかねて

乃御本望達しましまし我君五歳七道を征伐ましまし
時〻御歸城ありて御休息あらん爲にハ當城地の
景勝無雙にして御保養のため可然ゆゑんなり我君
御安座の地ハ武威を以て城郭となし權勢を以て
要害となしすべく然るべくゆゑんなりと言上せしに
信長大によろこびたまひ繩張を光秀に仰付られしと
となり
繩張ハ惟任日向守光秀はしめて七重の天守を立られ
なり南北廿間東西十七間二重の石垣高さ十二間
近國にならびなき壯觀なり二月中旬にハ經營大
かた成就しけるによりて廿三日信長安土にうつらせし

なり普請存の外にはか行しよつて珠光所持の茶碗を
賜はりけり扨山下にハ馬廻り衆乃屋敷割なりけり
追〻移住なるべきよしを諭され去年の約定のごとく
岐阜をば城介信忠にゆづらせるゝハ濃州の諸侍を
して信忠の旗下に我〻付られけり扨そのうち諸國より
大工職人瓦焼までおほくめし集められけるうちに
一官といふハ元大明の福州の者なり肥前國平戸に
來りて住し瓦を焼て渡世となしけるが日本住居と
なりにけるが妻をむかへて男子を生しむ今年
信長の召にあふて應し一家を江州高島郡まで移し
瓦を唐風に焼て天守をふかせなんとや駿河の

御所に仕て佐渡の奉行勤たりし大久保石見守長安と
いひしハこの一官の子なりとかやさきつかた羽柴筑前守
秀吉つねに信長の大膽不敵なりとおほして上洛の時も
僧坊に寄宿ありけるを諫め奉り京都に御座べき
ほどの城一ツ御經營あれかしと勸め奉りけれども信長
さらに聞入たまはずして此度大納言の右大將を兼させ
たまひてハ王城の守護を職となし給ふ大切の御身なり
寺院など卿相雲客の公達子息も住持し又卑職凡下
の子弟眷屬も寄宿し三衣一鉢の修行者樹下石上の
世捨人さまざまの人まで立入られけれハいかなる御仕置
なんどの漏聞ゆることもはかるべしかたくたまふよし

かくほどに只管諫め奉りけるにより信長ハ光秀をも
ごとく武威を城とし權勢を堀となすのみ自己の勇に
誇て洛中あるいハ城中も同しことぞとおぼしめしつれども
さすがる大臣たる秀吉が度々の異見まで捨かたく然ハ
今度上洛の序にそれ事を計らふべしと許させたまへハ
秀吉大いに悦び修造の用途土木の法量を沙汰し
けるにより然ハ二条の御所の跡空地になりあり彼處
こそ然るべしとて所司代村井長門守に修築あるべき
奉行を仰付らる筑前守もあちこち長門守を呼寄御座敷
向にハ金銀の泥繪をもちひし御庭にハ景色よき樹木
を植付殿の好をこらしてたる茶室かまへてもあるべし但

外構りなのくハ堀ひろく石垣たかく塀の柱土臺なんど
丈夫に作るべしかりそめならず天下武將の居所なり
用心等閑なくあるべきいそれなしと入魂しけれども
長門守信長乃御下知なりければいづれもとまづ庭より
して座鋪方普請を先にいとなまれしがこの年まで
石山本願寺を攻らるべしとて長岡藤孝荒木村重惟任
光秀原田備中守筒井順慶等をして先陣たらしめ五月五日
信長京都を發足ありて石山へ向はせ給ふこれハ今月三日
天王寺定番のものと先陣の諸將と一手になり本願寺
門徒と合戰しけるに原田備中守討死せし由注進あり
けるゆゑなり天王寺附城後詰の為にとて出陣ありしに

然るに石山門徒のうちに弓箭巧者の侍多く籠り
けれバ織田勢度々打まけあぐみつゝ門徒のうち
より覘ひよりて打ける鐵炮に中りて信長薄手負ひ
しに暑氣さへなさしき時節といひ陣中にては療治
行届がたしとて京都へたゞ一夜逗留ありて六月
六日安土へ歸御ありけるにより京乃經營差略を伺ふ
閑なく見合を居けるうちに惟任日向守此春三月より
天王寺定番に當りゐるが今度暫時の暇を賜はりて
坂本へ歸るとて京都へ立寄けるにより長門守幸此
よく思ひ二条御所の跡經始の樣を相談しけるに光秀
聞て殿の御爲になりぬことにゆゑ上意をうけざる

取扱ふべく然るべしさりながら格別に引替へたることと
ならんよりハかへつて仰付られしと相違せんも然るべからず
秀吉乃申処もよろしかるべけれども光秀がなすの處ハ
内の要害を城築と同じくなし外をハ尋常の御所乃
如くにせんよしにて光秀安土へ参上の節絵図を以て
言上に及び御下知に従ふべしと申けるにより長門守
大に悦びさらバとて光秀を伴ひ普請場にいたり
敷地を見せけるに光秀筆を取て一々に繪圖を作り
持かへりし故長門守にわたして置光秀安土に至り信長
にその繪圖を奉りければ信長感賞なしたまひその通り
普請すべき由村井かたへ御下知ありけるを以て

長門守はじめて安堵の思ひをなし普請にとりかゝ
かりける處へ羽柴筑前守來りてあらゝしく普請の
場所にいたり地割乃体を見ていかにもよろしからぬ
地取をなしつれどもこれハ責るに都合よろしからず
まのあたりにしてはかくをハかくおそれおほけれどかこの
そみハかうおもひなさしめそれゆゑ秀吉細々に利解
を示しけれバ長門守も大に感じそれよりさまざま
指圖をなしてしめ安土に持参してこれを伺ひけるに
信長熟覧ありていさゝか増損なしたまひけるより
長門守まづ指圖をなしたりしも兎角なしけるうちに
石山乃軍はじまり二条の修造そのまゝのびたるとかや

重修真書太閤記五編巻之六終